

## コラム 緑化植物 ど・こ・ま・で・き・わ・め・る

### アゼスゲ (*Carex thunbergii* Steud.)



辻 盛生 (小岩井農牧株式会社 技術研究センター) tsuji@koiwai.co.jp

アゼスゲは、日当たりの良い湿地や小川の縁に生育する多年生草本である。岩手県の小岩井農場では、5月中旬頃に開花し、6月下旬に結実する。美しい花をつける植物ではないため必ずしも目立つ存在ではないが、水辺で風になびくアゼスゲ群落はいかにも涼しげである。

草高 50~70 cm, 草丈 70~100 cm 程度で、葉幅は 2~4 mm 程でやわらかく、1,000 株/m<sup>2</sup> に至る密な群落を形成する。地下茎を出して繁殖する性質を持つが、人工群落では地下茎が基盤土の表層部 10 cm の範囲に集中し、不定根が 25 cm 以上の深さにまで達するのが確認されている。また、細根が表層部に集中し、地下茎と絡み合って密なルートマットを形成する。1 株から 5~6 本の地下茎を出し、その長さは平均約 15 cm, 長いものは 30 cm を超える。群落の拡張はこの地下茎からのクローン増殖が主要となる。湿生植物であるが、止水域であれば 20 cm 程度の浅水まで生育可能で、地下茎の数は水深が深くなるほど減少し、水深によって増殖が制御される<sup>1)</sup>。

上記の性質を活用し、水辺緑化用の植物として注目され、実際に用いられている。公園の水辺などでは、ヨシやガマといった大型の抽水性植物では、視界の遮蔽や過度の水域への進出による開水面の喪失などが問題視され、草丈の低い植物が必要とされる場面も多い。その際、視界を遮らない草丈のアゼスゲを浅水域に植栽してアゼスゲ群落を創出し、さらに水深 30 cm 程度の深みを設けることで開水面への藪化を防ぎ、開放的な水辺景観を容易に創出することが可能である。植栽間隔を約 20~30 cm とし、径 6~10.5 cm のポット苗を 9~16 ポット/m<sup>2</sup> の密度で植栽すると、翌年には密生した群落を形成可能である。また、ノハナショウブやミソハギなどの美しい花をつける湿生植物との混植によって、修景的な半自然草原の水辺景観も形成でき、水辺緑化に広がりを持たせることが可能となる。また、土地改良法の改正に伴い、農村



↑ 浅水域に創出されたアゼスゲ群落

整備における環境への配慮が必要とされる場面も増え、「アゼスゲ管」の名の通り畦や水路への応用(再利用?)も考えられる。

しかしながら、草丈が低く他の植物との混生が可能な性質から、逆に意図しない植物の侵入もあり、それらを除去するための維持管理が必要となる。維持管理労力の軽減には、水深 10 cm 程度の浅水域にアゼスゲの育成されたポット苗を植栽する方法が有効である。すなわち、地下茎で増殖するアゼスゲの生育可能水深は 20 cm 程度であるが、表土が水没した条件で発芽できなくなる植物種は多く、特に一年生草本の侵入抑制に有効である。また、このような浅水域は水辺エコトーンとしての生態的な機能を発揮し、水生生物の生息空間や水質浄化の面においても重要な役割を果たすと考えられる。

刈取り後の再生も早く、年に 2 回程度、9 月以前に刈取りすれば地上部は再生し、緑被として機能する<sup>1)</sup>。一年草や高茎植物の防除には、侵入植物の結実前に全面刈取りを行う管理も考えられる。年に数回の刈取りが行われる畦畔の植物として納得できる性質である。稲を束ねる縄の代用や、南部鉄器を作る際の刷毛として使用されるなど、古くから身近に存在し、人との関わりの深かった水辺植物でもある。

高度経済成長期以前は、アゼスゲは東北、関東、北陸、関西に多く分布していたことが記されている<sup>2)</sup>。しかしながら現在は、徳島県、愛媛県、高知県、熊本県、大分県でレッドデータブックに記載されており、遺伝的な多様性を維持する必要がある場所においては取り扱いに注意を要する<sup>3)</sup>。上記は笠原 (1951) において、元来自生の少なかった地域ではあるものの、圃場整備や里の水辺の管理放棄等、人と自然の関わりの変化がここでも影響しているものと思われる。

#### 引用文献

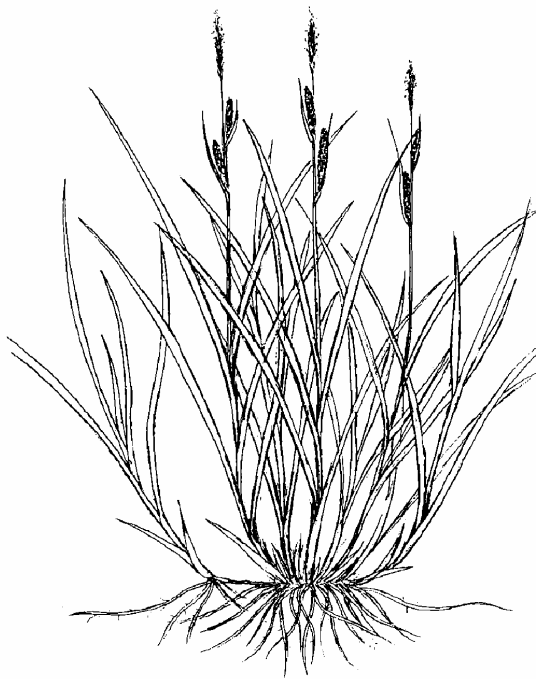
- 1) 辻 盛生・斉藤友彦・平塚 明・軍司俊道 (2004) アゼスゲ (*Carex thunbergii* Steud.) の植生護岸の特徴と維持管理, 自然環境復元研究 2(1), pp. 17-25
- 2) 笠原安夫 (1951) 本邦雑草の種類及び地理的分布に関する研究 第 4 報水田雑草の地理的分布と発生度, 農学研究 39, pp. 143-154
- 3) 辻 盛生・軍司俊道・斉藤友彦 (2004) 生物多様性保全に向けた水辺植物の地域性種苗に関する契約生産とそのコストの試算, 日本緑化工学会誌 29(3), pp. 404-407



↑小川の辺に自生するアゼスゲ。ヨシと混生しているが、定期的な刈取りによってヨシの被度は抑えられている。(1998.5 撮影)



↑アゼスゲの花。黄色が雄花で白が雌花。(2004.5 撮影)



↑アゼスゲ。



↑浮島の底面から出るアゼスゲの根。(2001.6 撮影)



↑アゼスゲの地下茎。1株から5本出ている。左側の地下茎は、母株から伸びたもの。(2003.11 撮影)



↑浅水域にアゼスゲポット苗を植栽した状態。水に浸った条件では、他の植物の発芽は抑制され、維持管理の軽減につながる。(2000.5 撮影)



↑創出されたアゼスゲ群落(1年半経過)。低い草丈によって視界が保たれている。この状態を維持していくためには、ヨシやガマ等の大型種の除去が必要。(2001.7 撮影)